

福島遺跡平塚・居屋敷地区発掘調査報告書

－ 県道万田四日市線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)－

2013

大分県教育庁埋蔵文化財センター

福島遺跡平塚・居屋敷地区発掘調査報告書

— 県道万田四日市線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2) —

序 文

本書は、大分県教育委員会が県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて実施した県道万田四日市線道路改良工事に伴う福島遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する中津市は、大分県の北西部、福岡県との県境に位置しており、名勝耶馬溪などの風光明媚で豊かな自然が存在するとともに、近年、国史跡に指定された長者屋敷官衙遺跡や史跡福沢論吉旧居など、古来より今に至るまで人々の生活した証となる歴史遺産も数多く残っています。

福島遺跡の調査では、城館の堀や内部施設の一部が確認されました。また、調査区中央の堀を共有して東西にそれぞれ方形区画の城館が並立して築かれていることもわかりました。

遺跡の周辺には長久寺(田丸城跡)や、妙相寺(町居屋敷遺跡)など周囲を堀で囲まれた中世の城館が数多く集中する地域であることから、今回確認した城館も、その一つとして機能したものであらうと思われます。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し衷心から感謝申し上げます。

平成25年3月29日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長 山 口 博 文

例 言

- 1 本報告書は、大分県教育委員会が平成23年度に実施した、県道万田四日市線道路改良工事に伴う福島遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、大分県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて、大分県教育委員会が実施した。
- 3 遺物や記録類の整理作業は、大分県教育庁埋蔵文化財センター(以下、センターという。)で実施した。
- 4 出土遺物及び関係資料は、センターで保管している。
- 5 本書で使用した地形図(1/25,000)は国土地理院作成のものを利用した。
- 6 本書の執筆・編集は、センター受託事業班友岡信彦が担当した。
- 7 本書の作成にあたり、中津市教育委員会浦井直幸氏に指導・助言及び資料の提供を受けた。

目 次

序文

例言

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過	1
第2節 発掘調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	2
第4節 調査組織の構成	2

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要	5
第2節 区域1の調査	8
第3節 区域2の調査	20

第4章 まとめ	24
---------------	----

挿図目次

第1図	福島遺跡周辺の遺跡分布図	4
第2図	福島遺跡調査区位置図	5
第3図	福島遺跡路線周辺図	6
第4図	福島遺跡全体図	7
第5図	区域1 遺構配置図	8
第6図	土坑1 実測図	9
第7図	土坑2 実測図	9
第8図	土坑3 実測図	9
第9図	土坑4 実測図	10
第10図	陥穴状遺構実測図	10
第11図	堀1 実測図	11
第12図	堀1 出土遺物実測図1	12
第13図	堀1 出土遺物実測図2	13
第14図	堀1 出土遺物実測図3	14
第15図	堀2 実測図	15
第16図	溝状遺構1 実測図及び出土遺物実測図	16
第17図	溝状遺構2 実測図及び出土遺物実測図	17
第18図	溝状遺構3 実測図及び出土遺物実測図	18
第19図	溝状遺構4～6 実測図	19
第20図	柱穴遺構実測図	19
第21図	区域2 遺構配置図	20
第22図	土坑5 実測図	21
第23図	堀3 実測図	22
第24図	溝状遺構7～10 実測図	23
第25図	福島遺跡周辺字図	24

表目次

表1	遺物観察表	14
----	-------	----

写真図版目次

図版一	区域1 全景・遺構土層及び完掘状況
図版二	区域1 遺構土層及び完掘状況
図版三	区域1 遺構土層及び完掘状況遺物 区域2 遺構完掘状況
図版四	出土遺物

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

調査の起因

県道万田四日市線は、中津市万田と宇佐市飛永を結ぶ全長 8.6 km の主要地方道である。調査の起因となった県道万田四日市線（福島区）道路改良工事は中津市大字福島と伊藤田間を結ぶ全長 1,680m のバイパス整備事業である。この事業は当路線の幅員狭小区間の整備及び沿線の小中学校の通学路となる歩道の整備により、安全な通行確保を目的としている。

調査の経過

今回、調査の対象となった万田四日市線の計画路線上には、福島遺跡・三保遺跡や古代官道の想定ルートが位置するため、調査方法など取扱いに注意を払った。

県土木建築部中津土木事務所からの試掘・確認調査依頼は、平成 19 年度から平成 22 年度まで、毎年依頼を受け、合計 5 度の試掘・確認調査を実施した。

平成 19 年度の調査対象地は 3,500 m² で、三保遺跡の範囲内であった。調査の結果、当範囲内は近年水田の造成が行われ、旧地形が大きく改変されており、遺構・遺物とも確認されなかった。

平成 20 年度の調査対象地は 9,000 m² で、対象地は周知遺跡の範囲内ではなかったが、一部が古代官道の想定ルート上に位置していた。調査の結果、約 1,700 m² で柱穴・土坑等を確認したため、本調査が必要となった。当地区は周知遺跡の範囲内ではなかったため、新発見の遺跡であった。このため、所在地の字名から「丁ノ坪遺跡」とし、平成 21 年 12 月 1 日～平成 22 年 1 月 29 日の間、本調査を実施した。報告書は平成 22 年度に刊行した。

平成 21 年度は、「丁ノ坪遺跡」の本調査 1,700 m² とは別に、確認調査対象地は 9,200 m² で、バイパス建設予定地の起点(西)側と終点(東)側の調査であった。起点側の調査予定地は、福島遺跡の範囲内であった。一部未買収地があったため、この部分を残して確認調査を行った。調査の結果、約 1,600 m² で柱穴・土坑等を確認したため、本調査が必要となった。本調査は、未調査地区の買収終了後にこの部分の確認調査結果と併せて行うこととした。終点側の調査では遺構・遺物とも確認されなかった。

平成 22 年度の調査対象地は平成 21 年度未調査区間であった約 1,000 m² に対して行った。ほぼ全面で柱穴や溝状の遺構を確認したため、あらためて、昨年度遺構を確認した調査区を含め、次年度に本調査を行うこととした。

本調査は、平成 23 年 7 月 13 日～平成 23 年 10 月 14 日まで約 2,600 m² を行った。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は、埋蔵文化財センター(以下「センター」という。)が調査主体となって実施した。重機や労務管理など支援業務については、株式会社イビソクへ一括委託する体制をとった。委託内容は、①重機による表土除去、②人力による遺構検出、③人力による遺構掘削、④遺構実測、⑤遺構写真、⑥空撮、現場管理などであった。一方、センターでは担当者が調査区の設定、遺構面の確認、遺構の平面形、規模・配置・相互関係の確認、埋土の分層を行い、遺物出土状態、付属施設を確認するなど個別遺構の性格、また遺跡全体の把握を行ったうえで、受注業者の調査技師に作業段階に応じた指示等を行うなど調査精度を確保する体制で臨んだ。

第3節 整理作業の経過

整理作業は、基本作業と資料作成業務を一括して委託し、作業場所をセンターとして株式会社九州文化財総合研究所に委託して実施した。具体的な内容は、①遺物水洗、②遺物注記、③遺物接合、④遺物復元の4工程を前半工程とし、⑤遺物実測、⑥遺物拓本、⑦遺物観察基礎データ作成、⑧遺物実測図トレースの4工程を後半工程とした。諸作業として、遺物取り出し、遺物区分け・整理、遺物収納、整理作業施設の清掃等の4作業を加えて整理作業を委託した。

報告書作成作業のうち、遺物図版・遺構図版の作成、遺物写真撮影、遺物及遺構写真図版の作成、原稿執筆、編集作業については担当職員が行った。

第4節 調査組織の構成

調査時の調査体制については下記のとおりである。

平成23年度

山口博文	埋蔵文化財センター	所長
坂本嘉弘	埋蔵文化財センター	次長
宮内克己	埋蔵文化財センター	次長兼一般事業班参事(総括)
春山義光	埋蔵文化財センター	管理予算班課長補佐(総括)
友岡信彦(調査担当)	埋蔵文化財センター	一般事業班主幹

平成24年度

山口博文	埋蔵文化財センター	所長
宮内克己	埋蔵文化財センター	次長
小林昭彦	埋蔵文化財センター	次長兼一般事業班参事(総括)
春山義光	埋蔵文化財センター	管理予算班課長補佐(総括)
友岡信彦(報告書担当)	埋蔵文化財センター	受託事業班主幹

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

中津市は大分県のもっとも北に位置し、西は山国川を挟んで福岡県と県境をなし、北は周防灘に面している。旧市域（平成17年3月中津市と下毛郡3町1村の市町村合併）は海岸寄りに山国川が形成した扇状地「沖代平野」と、平野の南に展開する低平な洪積台地「下毛原台地」、南東は八面山から派生する樹枝状の低丘陵からなる。

今回調査を行った福島遺跡は、中津市中心部から5kmほど南東寄りの大字福島に存在する。この福島地区は、南東部を北東へ流れる犬丸川によって形成された洪積台地上に位置する。福島遺跡はこの台地上に東西約500m、南北約700mの範囲に展開し、縄文時代から中世にかけて多くの遺跡が存在する。

第2節 歴史的環境

福島遺跡周辺には、榊垣遺跡や三保遺跡、田丸城跡など縄文～中世まで多くの遺跡が存在する。特に調査区周辺には「屋敷田」、「本丸」、「二ノ丸」などの地名が字名として残っており、中世遺跡が集中する地域である。

福島遺跡周辺の旧石器時代の遺跡については、才木遺跡や榊多田遺跡などが確認されているが、いずれも後期旧石器時代に属し、出土遺物は断片的な名資料である。

縄文時代になると遺跡の数は増大する。福島遺跡では昭和55年に遺跡西側の発掘調査が行われ、縄文時代後期の住居跡3軒や、土坑墓4基と人骨が発見された。また、隣接地からは貝塚が確認された。この貝塚は入垣貝塚として周知され、榊垣遺跡とセットでとらえられる遺跡である。昭和57年に榊垣遺跡（注1）として大分県指定の史跡となった。また、福島遺跡周辺にも長久寺貝塚や上野貝塚などが確認されている。

弥生時代になると遺跡は他の時代に比べ調査件数は少ない傾向にあるが、逆に市域全域に展開するようになる。台地の縁辺部では福島遺跡以外に上ノ原遺跡や三保遺跡、森山遺跡などが確認されている。

その中で福島遺跡では、今年度調査区の南西100mの地点で平成5年に中津市教育委員会が発掘調査を行っている（注2）。この調査では220㎡の調査区内から18基の墳墓と4基の祭祀土壌が検出された。墳墓は二列埋葬の形態をとっていた。また、多量の土器が廃棄されていた2号祭祀土壌の在り方は注目すべきものであり、宇佐市の御幡遺跡や野口遺跡に共通するものである。

古墳時代になると福島遺跡の周辺・犬丸川流域では大坪遺跡や榊多田遺跡など集落遺跡が確認されている。また、生産遺跡では伊藤田窯跡群があげられる。この窯跡群には、古墳時代から歴史時代にかけて多くの窯跡が分布しており、東九州有数の古代窯業産地の一つとして知られている。

奈良時代以降になると、台地中央を東西に貫く官道「勅使街道」が整備されている。この官道沿いには相原廃寺、下毛郡衙や薦神社などが配置されている。平成21年度に調査を行った「丁ノ坪遺跡」も官道想定地の一部とされていたが、調査による明確な遺構は確認できなかった。

中世になると田丸城跡（長久寺城跡）をはじめ、仮屋敷遺跡、町屋敷遺跡など方形区画をもつ中世城館が福島遺跡周辺の低丘陵上に築かれるようになる。今回調査を行った福島遺跡の調査範囲は「居屋敷」、「平塚」と呼ばれる字名を持ち、周囲を方形区画で囲まれていた。また、遺跡内においては昭和48年に地下式横穴（注3）の調査が行われている。16世紀末には黒田氏入封により中津城が築かれる。

近世になると中津藩となり、城主は黒田氏から細川氏に替わり、城や城下の整備が進む。その後小笠原氏、さらに奥平氏と替わり、明治4年の廃藩置県を迎える。

注1 「ボウガキ遺跡」（中津市文化財調査報告書）三保の文化財を守る会・中津市教育委員会 1992年1月

注2 「犬丸川流域遺跡群」（中津市文化財調査報告書第19集）中津市教育委員会 1997年3月

注3 「福島地下式横穴」（中津市文化財調査報告書）中津市教育委員会 1974年3月



- | | | | | |
|-----------|------------|------------|------------|-----------|
| 1 福島遺跡 | 2 土木貝塚 | 3 北原遺跡 | 4 諸田南遺跡 | 5 上畑成遺跡 |
| 6 田代遺跡 | 7 田丸城跡 | 8 長久寺貝塚 | 9 町居尾敷遺跡 | 10 丁ノ坪遺跡 |
| 11 三保遺跡 | 12 畑中遺跡 | 13 加来東遺跡 | 14 山中城跡 | 15 ポウガキ遺跡 |
| 16 入垣貝塚 | 17 仮屋敷遺跡 | 18 福島地下式横穴 | 19 中原遺跡 | 20 下伊藤田城跡 |
| 21 黒川古墳 | 22 伊藤田田中遺跡 | 23 屋敷田遺跡 | 24 大丸川流域遺跡 | 25 前田遺跡 |
| 26 上伊藤田城跡 | 27 城山横穴墓群 | 28 城山古墳群 | 29 城山竊跡 | 30 草場竊跡 |
| 31 穂屋1号竊跡 | 32 穂屋2号竊跡 | 33 大谷竊跡 | 34 夜鳴池竊跡 | 35 ホヤ池竊跡 |

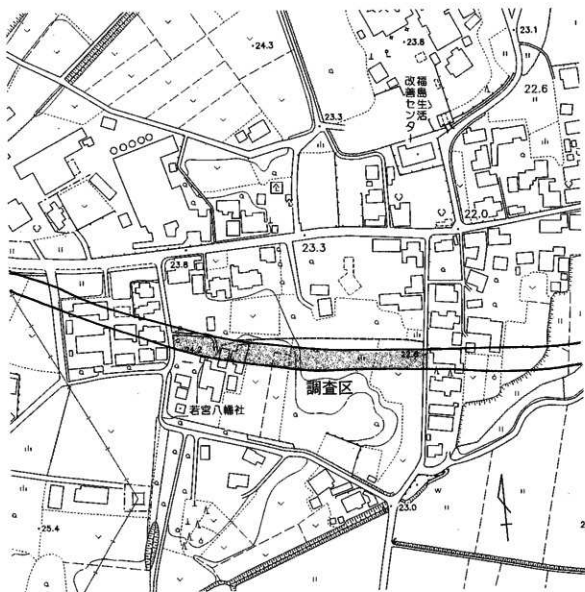
第1図 福島遺跡周辺の遺跡分布図

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

福島遺跡は、中津市大字福島に位置し、犬丸川上流域の標高23～24m前後の河岸段丘上に立地する。福島遺跡の調査としては昭和48年(1973年)の「福島地下式横穴」の調査以来、平成17年(2005年)まで中津市教育委員によって12件の確認・本調査を行っている。

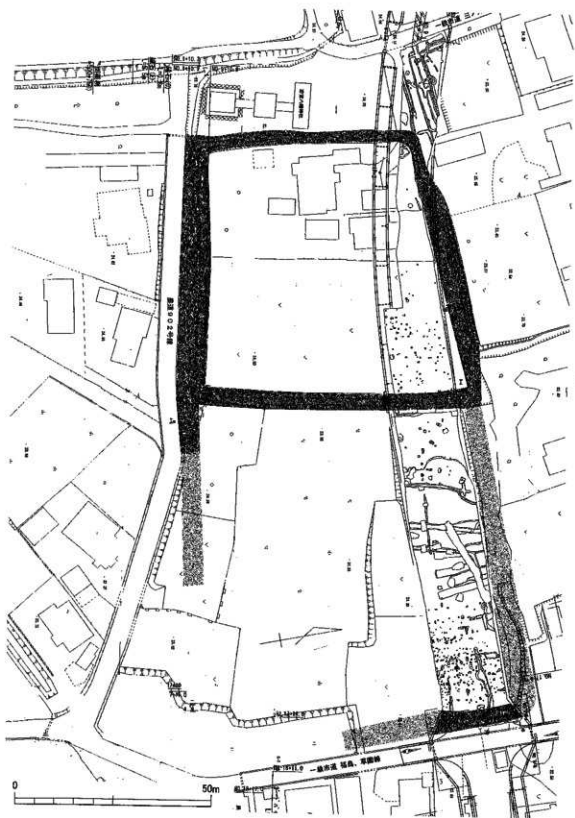
今回の調査は13件目であり、遺跡内の北端に位置する。過去の調査箇所との混乱を防ぐため、字名を使用して「福島遺跡 居屋敷・平塚地区」とした。



第2図 福島遺跡調査区位置図

調査では中世頃と思われる方形区画を構成する城館の堀の一部や溝状遺構、土坑、柱穴などが確認された。時期判別できる遺構や遺物は調査区の東側半に集中していた。

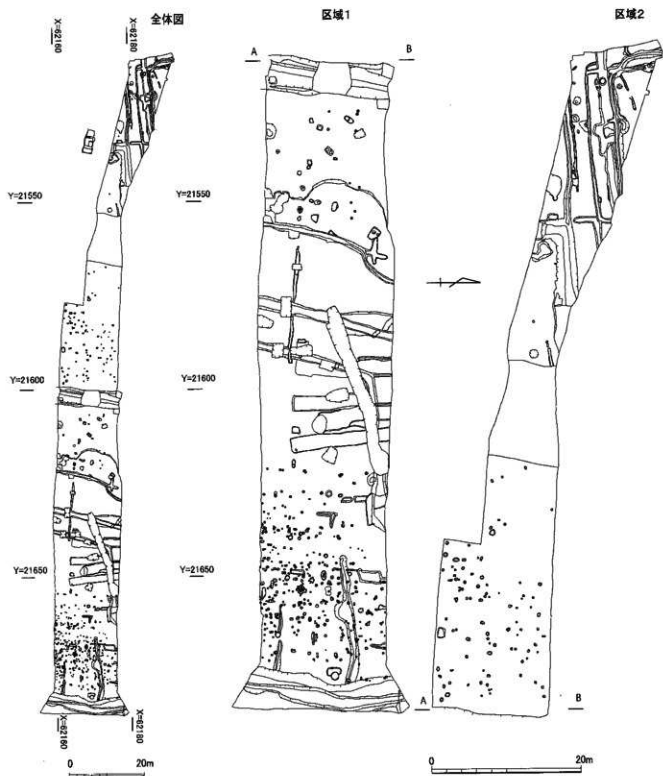
第3図の濃く塗りつぶした部分は、ほぼ確認できた城館の堀であり、薄く塗りつぶした部分は一部想定
の堀の範囲である。



第3図 福島遺跡跡線周辺図

調査区は東西約 180m と長いため、中央付近に位置する堀を境に区域 1・区域 2 に分け調査を行った。
 区域 1(東側)では、中世頃の堀の一部や、柱穴群・溝状遺構などを検出した。東側の堀の埋土中には多
 量の遺物を含んでいた。

区域 2(西側)では、柱穴群と調査区西端で、堀の一部が確認できた。



第4図 福島遺跡全体図(1/1,000・1/500)

第2節 区域1の調査

区域1

区域1は全調査区の東側半分で、東西長約90m、幅16m前後の調査区である。今回の調査で遺物を伴う遺構はほぼ区域1に集中している。

区域1は、中世の城館と思われる方形区画遺構2基(第2図)が、並列して構築されている内の東側城館内に位置する。

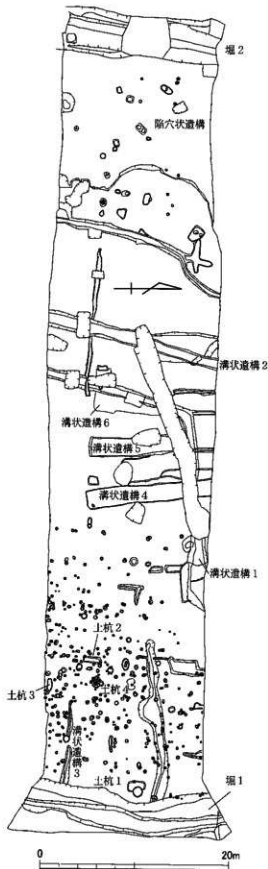
区域2と区域1の境となる部分は、城館を囲む南北に延びる堀(堀2)である。東端は市道に面していたが、調査区端で新たに幅約4mの南北に延びる堀の一部(堀1)が確認された。この堀の確認によって東側に位置する城館は、東西110m、南北80m前後の堀を持つ城館と推定される。なお、この調査区の南東側は現在も畑地であり、遺構の残りは良好と思われる。

堀1の埋土中からは、瓦質の播鉢など多くの遺物が出土している。

また、堀1の西側では、多くの土坑と柱穴群が確認された。この土坑や柱穴群は、堀から西へ30mの範囲内で確認されており、この範囲内に何らかの居住空間施設があったと思われる。土坑は削平を受けているためか、浅く残りは良くなかった。遺物はほとんどが破片で出土量は少ない。柱穴には径0.3m、深さ0.5m前後で柱痕を残す個体も多く見られた。

区域1調査区中央付近になると、柱穴は認められず、幅1m、深さ0.5m前後の溝状遺構2条と、幅約2m、南北長13m以上、現存深度0.1m前後の用途不明の溝状遺構4条などが確認された。いずれも遺物はほとんど含まない。

区域1西側は近現代の開発による攪乱がほとんどであったが、1基だけ陥穴と思われる土坑を確認した。遺物などは出土しなかった。



第5図 区域1遺構配置図(1/400)

土坑1(第6図)

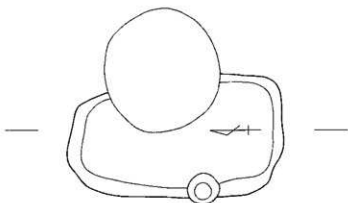
土坑1は区域1の東端、堀1の西1mに位置する。東側を近世と思われる径1m前後の井戸によって切られている。長軸は1.8m、短軸1.1m、深さ0.1m前後で浅く、主軸を南北にとる隅丸方形の土坑である。埋土は灰黄褐色土の単一層である。遺物は出土していない。

土坑2(第7図)

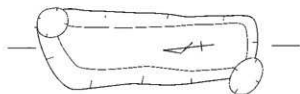
土坑2は調査区東側の中央付近に位置する。長軸は2.0m、短軸0.6~0.7m、深さ0.15m前後で浅く主軸を南北にとる隅丸方形の土坑である。埋土は灰黄褐色土と黒褐色土である。遺物は出土していない。

土坑3(第8図)

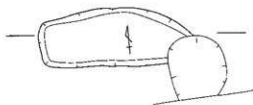
土坑3は調査区東側の南壁際に位置する。長軸は1.4m、短軸0.5m、深さ0.15m前後で浅く主軸を東西にとる隅丸方形の土坑である。埋土は下層に黒褐色土が堆積していて、上層は黒褐色土層と明黄褐色土(地山土)が混じっている。遺物は出土していない。



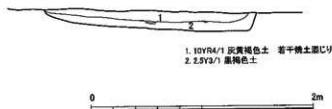
第6図 土坑1実測図(1/30)



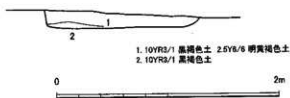
23.00m



23.00m



第7図 土坑2実測図(1/30)



第8図 土坑3実測図(1/30)

1. 10YR4/1 灰黄褐色土 若干機土混じり
2. 2.5Y3/1 黒褐色土

1. 10YR3/1 黒褐色土 2.5Y3/6 明黄褐色土
2. 10YR3/1 黒褐色土

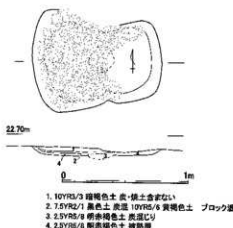
土坑4(第9図)

土坑4は調査区東側のほぼ中央付近に位置する。上面は削られてわずかにレンズ状の窪みが確認された土坑である。床面は焼土化していて、その上部に炭が堆積していた。長軸は1.05m、短軸0.6～0.8m、深さ6cm前後の浅い土坑である。主軸を東西にとり、やや歪な隅丸方形をしている。

土坑内には、全体の約2/3に厚さ2cm程の炭層が堆積している。炭層を除くと中央に径0.2m深さ6cmのレンズ状をした円形の掘り込みが確認された。床面は全面が固く焼しめられている。

この土坑は、柱穴群の中に位置することから、上部に建物施設が存在が考えられ、精査したが明確な遺構は確認できなかった。

遺物は炭層の上に堆積している埋土中から土師器の鉢の口縁部破片が出土したが、小破片で図示できなかった。時期は16世紀代と思われる。

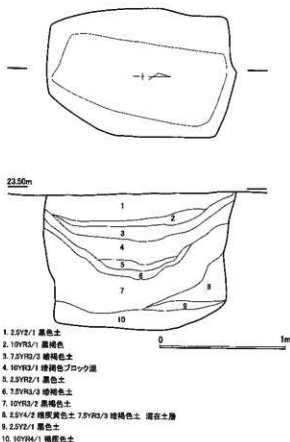


第9図 土坑4実測図(1/30)

陥穴状遺構(第10図)

陥穴状遺構は調査区の西端で確認された。上部の長軸1.52m、短軸1.0mのやや歪んだ長方形で主軸方位をN-22°-Wにとる。内径は長軸1.35m、短軸0.58mの長方形で、深さは1.05mである。遺物は出土していない。

陥穴状遺構は数基がまとまって検出される傾向にあるため周囲を確認したが、他には確認できなかった。



第10図 陥穴状遺構実測図(1/30)

堀1(第11図)

堀1は、区域1調査区の東端で確認された。調査区内では一番低い場所に位置し、上部は後世に削平を受けたものと思われる。

この堀は東側城館の東端の堀の一部で、上部幅は約4m、深さは0.7～0.8mである。床面は平坦で幅0.6～1.5mの逆台形を呈している。調査区内からは土塁などの施設は見られなかった。

埋土は5層確認したが、堆積状況から掘り直しを行った様子がわかる。掘り下げ途中から水が湧き、当時は豊富な水位を保っていたものと思われる。

遺物は埋土中から瓦質の播鉢など多くの遺物が出土している。

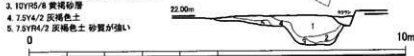
出土遺物(第12～14図)

1・2は茶釜の取手と、口縁部から胴部にかけての一部でいずれも瓦質土器である。3・4は備前系陶器の播鉢の一部である。4は内面に斜め方向の播目を持ち、口縁部の形態から乗阿編年(※1)の中世6期に比定される。時代的には16世紀前期末頃の製品であろう。5～8は瓦質土器の播鉢である。9は瓦質土器の壺。10～14はやはり瓦質土器の火鉢である。11・12は2条の突帯間にスタンプ文が巡る。15～18は瓦質土器の鉢。19～27は鍋の口縁から胴部にかけての一部で、いずれも瓦質土器である。

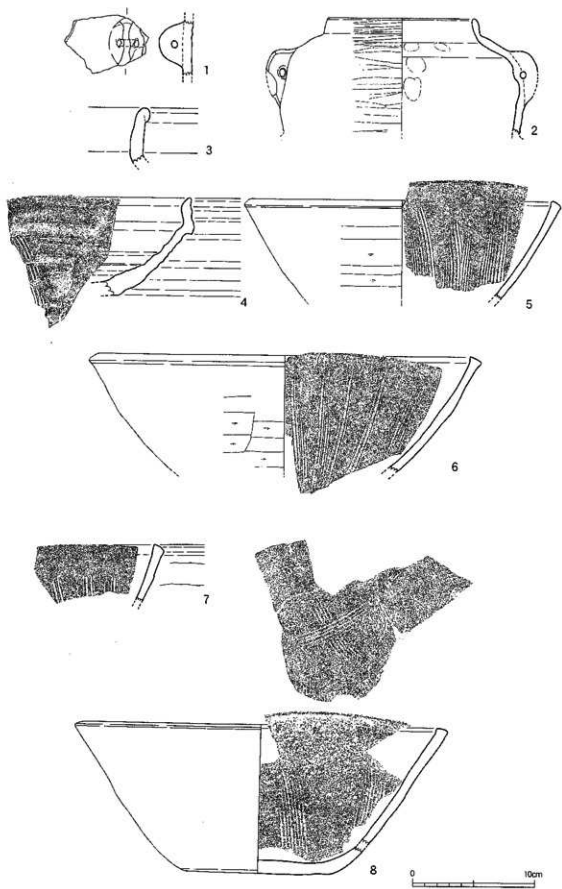
出土遺物から見た堀1の時期は16世紀前期末頃～後半であろうと考える。

※1 乗阿 実「備前焼播鉢の編年について」・「中近世の備前焼播鉢の編年案」(『第3回中近世備前焼研究会資料 付第1回・第2回研究資料』所収 2000年)

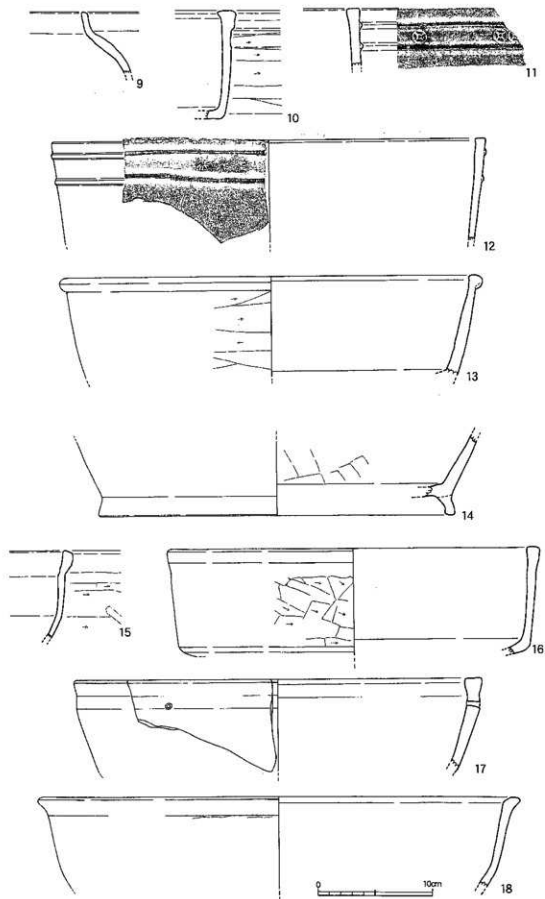
1. 5Y2/1 黒色土 2.5Y8/6 粘黄褐色土ブロック層
2. 5Y2/1 黒色土 10YR5/6 黄褐色砂質土
3. 10YR5/6 黄褐色砂
4. 7.5Y4/2 灰褐色土
5. 7.5YR4/2 灰褐色土 砂質が強い



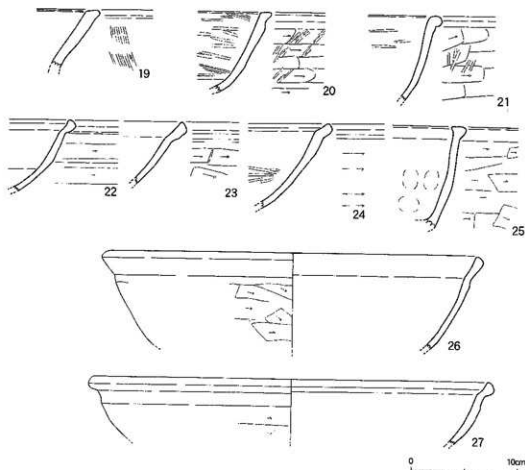
第11図 堀1実測図(1/100)



第12圖 壺1出土遺物実測圖1(1/3)



第13图 堀1出土遺物実測図2(1/3)



第 14 図 堀 1 出土遺物実測図 3(1/3)

表 1 遺物観察表

出土番号	種類	形跡	長さ(cm) ※0は長さ不明			外面の文様・調整	内面の文様・調整	色調	粘土	備考
			口径	底径	器高					
1	瓦質土器	高台				ナデ調整	ナデ調整	淡褐色	砂粒・長石・角閃石多い	孔は焼成前
2	瓦質土器	高台	(12.0)			横方向へラミガキ	横ナデ・指押さえ	灰褐色	砂粒少なく長石多い	外面スス付着
3	陶砂	線跡				面転横ナデ	面転横ナデ	暗赤褐色	砂粒・長石多い	磨削跡
4	陶砂	線跡				面転横ナデ	面転横ナデ・斜め横目	灰褐色	砂粒・長石多い	磨削跡
5	瓦質土器	線跡	(24.6)			横ナデ・横方向の削り	横ナデ・平行方向の横目	淡褐色	砂粒・長石・角閃石多い	
6	瓦質土器	線跡	(30.4)			横ナデ・横方向の削り後ナデ	横ナデ・平行方向の横目	暗灰褐色	砂粒・長石・角閃石多い	
7	瓦質土器	線跡				横ナデ・横方向の削り	横ナデ・平行方向の横目	淡褐色	砂粒・長石・角閃石多い	
8	瓦質土器	線跡	(20.6)	(12.4)	(12.2)	ナデ調整	横ナデ・平行方向の横目	淡褐色	砂粒・長石・角閃石多い	
9	瓦質土器	糸				横ナデ	横ナデ	淡褐色	砂粒少なく長石多い	
10	瓦質土器	糸			9.2	横ナデ・横方向の削り	横ナデ	淡褐色	砂粒・長石多い	
11	瓦質土器	火鉢				横ナデ・横方向のミガキ	ナデ調整	黄灰色	砂粒・長石多い	2条の奥帯間にスタンプ文
12	瓦質土器	火鉢	(37.6)			横ナデ	工具による斜め方向のナデ	淡褐色	砂粒少なく長石多い	2条の奥帯間に菊花文のスタンプ文
13	瓦質土器	火鉢	(35.8)			横ナデ	横ナデ	淡褐色	砂粒・長石・角閃石多い	
14	瓦質土器	火鉢			(31.2)	横ナデ	斜め方向のナデ	褐色	砂粒・長石少ない	
15	瓦質土器	鉢				横方向への削り・横ナデ	横ナデ	淡褐色	砂粒少なく長石多い	
16	瓦質土器	鉢	32.0	29.6	9.4	浅いへら削り・横ナデ	横ナデ	黄灰色	砂粒・長石多い	
17	瓦質土器	鉢	(35.2)			削り後横ナデ	横ナデ	淡黄褐色	砂粒少なく長石多い	
18	瓦質土器	鉢	(41.8)			横ナデ	横ナデ	淡黄褐色	砂粒・長石・角閃石少ない	
19	瓦質土器	鉢				斜めハケ後横ナデ	横方向のナデ	暗灰褐色	砂粒・角閃石少なく長石多い	外面スス付着
20	瓦質土器	鉢				へら削り後縦方向へラミガキ	横ハケ後縦方向へラミガキ	暗黄褐色	砂粒・角閃石少なく長石多い	
21	瓦質土器	鉢				へら削り後へラミガキ	へら削り後へラミガキ	暗黄褐色	砂粒少なく長石多い	
22	瓦質土器	鉢				横方向への削り・横ナデ	横ナデ	茶褐色	砂粒・長石・角閃石多い	
23	瓦質土器	鉢				口縁部横ナデ・胴部へら削り	横ナデ	淡黄褐色	砂粒・角閃石少なく長石多い	
24	瓦質土器	鉢				口縁部横ナデ・胴部へら削り	横ナデ後へラミガキ	黄灰色	砂粒・角閃石少なく長石多い	
25	瓦質土器	鉢				口縁部横ナデ・胴部へら削り	丁寧な横ナデ・横目後	黄褐色	砂粒・長石・角閃石少ない	
26	瓦質土器	鉢				口縁部横ナデ・胴部へら削り	丁寧な横ナデ	黄褐色	砂粒少なく長石多い	
27	瓦質土器	鉢	(37.0)			横方向への削り・横ナデ	横ナデ	黄褐色	砂粒・長石・角閃石多い	外面スス付着

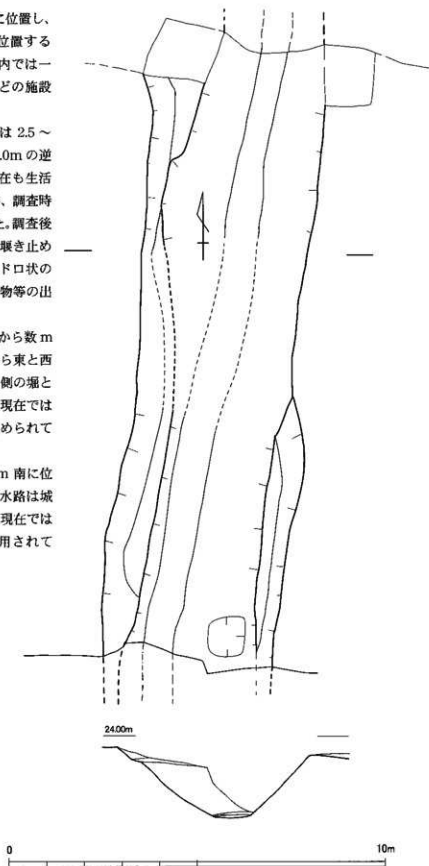
堀2(第15図)

堀2は、区域1と区域2の境に位置し、並列する2つの城館の中央に位置する南北に延びる堀である。調査区内では一番高い場所に位置する。土塁などの施設は見られなかった。

上部幅は約4.5～5m、深さは2.5～2.7mである。床面は平坦で幅1.0mの逆台形を呈している。この堀は現在も生活水路として使用されているため、調査時当初はほぼ満水の状況であった。調査後半に水位が減少したため、水を堰き止め調査を実施した。水路内にはヘドロ状の埋土が約1m堆積しており、遺物等の出土はなかった。

なお、この堀の北側は調査区から数mでコーナーとなり、この場所から東と西に分離し、それぞれの城館の北側の堀としての役割を果たしているが、現在では堀の一部は削平を受けたり、埋められている。

堀の南端は調査区から約50m南に位置する水路に接している。この水路は城館の南側の堀と考えられるが、現在では地域の重要な用水路として活用されている。



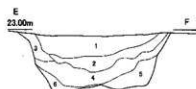
第15図 堀2実測図(1/100)



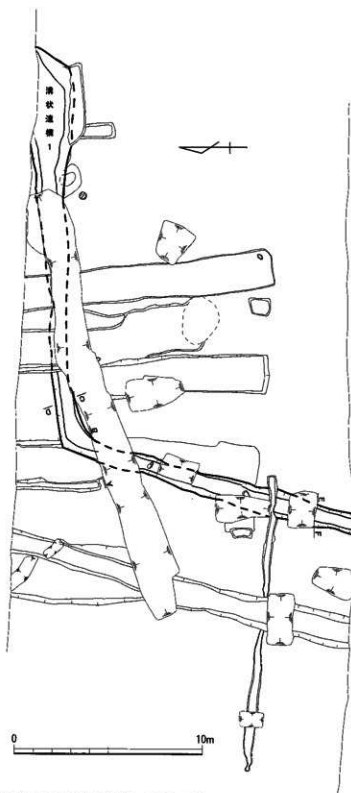
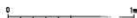
1. 10YR4/1 褐灰色土
2. 2.5Y6/6 明黄褐色土 黒褐色土ブロック混
3. 2.5Y4/1 黄灰色土
4. 10YR3/3 暗褐色土
5. 2.5Y4/2 黒色土 黄褐色土ブロック混
6. 2.5Y4/3 オリーブ黒色土
7. 10YR5/1 褐灰色土
8. 10YR2/1 黒色土 2.5Y6/6 明黄褐色土 混在土層
9. 10YR2/1 黒色土
10. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色ブロック混
11. 2.5YR6/6 明黄褐色土 黒褐色土ブロック混
12. 2.5Y4/1 黄灰色土



1. 10YR4/1 褐灰色土 10YR6/6 明黄褐色土 混在土層
2. 10YR4/1 褐灰色土 黄褐色小ブロック混
3. 2.5Y3/1 黒褐色土
4. 10YR4/1 褐灰色土 10YR6/6 明黄褐色土 混在土層
5. 7.5YR4/1 褐灰色土
6. 2.5Y4/1 黄灰色土



1. 10YR2/1 黒色土
2. 10YR4/1 褐灰色土
3. 7.5YR3/1 黒褐色土
4. 2.5Y3/2 黒褐色土 黒色土ブロック混
5. 2.5Y3/2 黒褐色土
6. 2.5Y4/1 黄灰色土



第 16 図 溝状遺構 1 実測図及び出土遺物実測図 (1/200・1/30・1/3)

溝状遺構 1 (第 16 図)

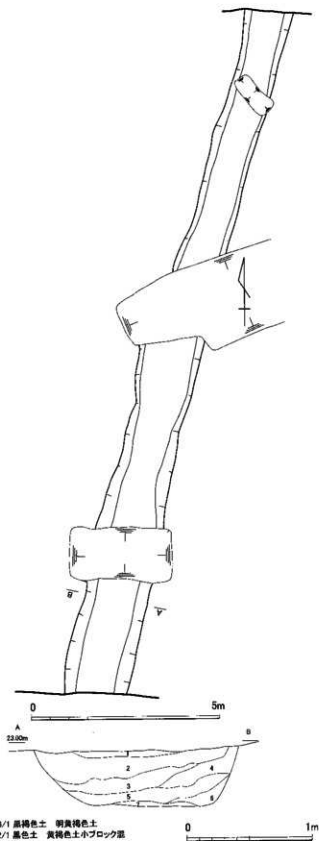
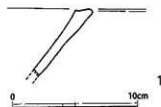
溝状遺構 1 は調査区のほぼ中央に位置し、両端とも路線外へと延びている。南端から北方向へ約 15m 進み、ここから約 115° の角度で東方向へ屈折し、約 20m で北側調査区外へと延びていく。全体の半分以上は擾乱等によって壊されているが全容はほぼ確認できた。上部幅は約 1.0～1.2m、深さは 0.4～0.45m、床面は平坦で幅 0.5～0.7m の逆台形を呈している。埋土は黒褐色土と褐灰色土の 2 層がほぼ交互に堆積している。

遺物は瓦質土器の鍋や火鉢の破片など十数点が出土しているが、図示できたのは 1 点である。

出土遺物 1 は溝状遺構 1 から出土した瓦器皿である。1/4 程の残存であり、復元口径は 12.4 cm、器高 2.4 cm、底径は復元で 9.2 cm である。内面は回転横ナデ、外面は口縁から胴部は回転横ナデ、底部はヘラ切り、ロクロ成形である。色調は灰褐色を呈している。時期は 16 世紀前半から中頃と思われる。

溝状遺構 2 (第 17 図)

溝状遺構 2 は調査区のほぼ中央に位置し、両端とも路線外へと延びている。主軸方向は N-20°-E で溝状遺構 1 から西へ 4 m の位置で南北方向に平行して構築されている。屈曲部は路線外と思われる。溝状遺構 1 とともに二重の溝と考えられる。上部幅は約 1.2～1.7m、深さは 0.4～0.45m、床面は平坦で幅 0.9～1.0m の逆台形を呈している。



1. 10YR3/1 黒褐色土 明黄褐色土
2. 10YR2/1 黒色土 黄褐色土小ブロック混
3. 2.5Y2/1 黒色土
4. 2.5Y3/2 黒褐色土
5. 10YR2/1 黒色土 暗褐色土ブロック混
6. 10YR3/3 暗褐色土
7. 10Y2/1 黒色土 暗褐色ブロック混

第 17 図 溝状遺構 2 実測図及び出土遺物実測図 (1/100・1/30・1/3)

埋土の堆積状況も溝状遺構1と酷似しており、黒褐色土と褐灰色土の2層の交互堆積である。

区域1内においてはこの溝状遺構2を境に、溝から西には中世の遺構は存在しない。

遺物は瓦質土器の鍋や火鉢の破片など数点が出土しているが、図示できたのは1点である。

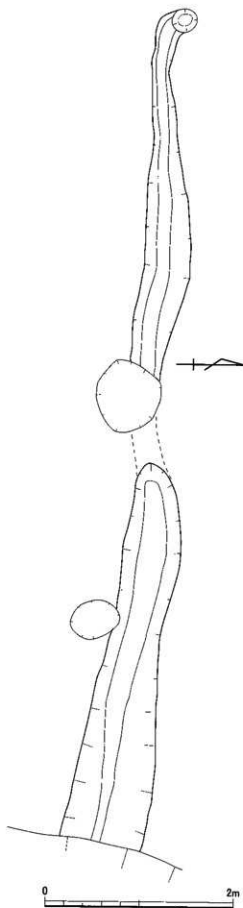
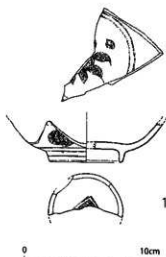
出土遺物 1は土師質の鍋口縁部の破片である。内外面とも工具によるナデ調整を行っている。色調は黄褐色を呈していて、外面にススが附着している。

溝状遺構3(第18図)

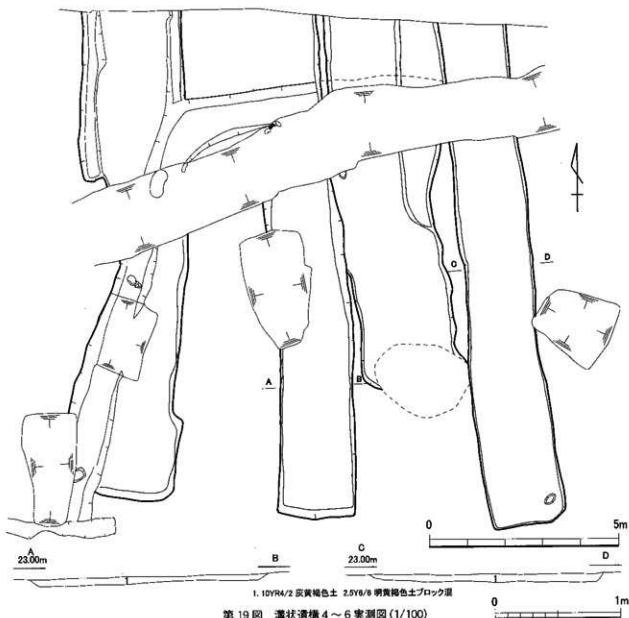
溝状遺構3は調査区東側の堀1に流れ込む東西に延びる溝である。幅は0.3~1.4m、長さは10.3mで、残りは悪く、深度は5cm前後である。埋土は灰黄褐色土が床面に残っていた。

出土遺物 図示した青花碗1点が出土している。中国景德鎮窯系の製品で、小野分類(※2)のE群に分類され、16世紀後半に比定される。見込みに圏線を書き、圏線内に花文を描く。高台内には異体字による銘款がみられる。

※2 小野正敏「15~16世紀の染付碗・皿の分類と年代」(『貿易陶磁研究』No. 2 1982年)



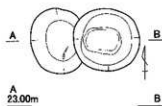
第18図 溝状遺構3実測図及び出土遺物実測図(1/40・1/3)



溝状遺構 4～6 (第 19 図)

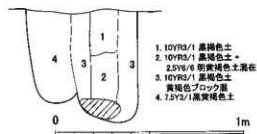
溝状遺構 4～6 は調査区中央付近に位置し、南北に展開する遺構で、北側は調査区外へと延びる。4 基は規則性を持って構築されている。埋上はいずれも灰黄褐色土層で明黄褐色土のブロックが混入している。幅 1.8m 前後、深さは 0.05～0.1m 前後で残りは悪い。遺物は出土していない。

溝状遺構としているが、この遺構の性格は不明である。



柱穴 (第 20 図)

調査区内からは柱痕が残っている柱穴が多く確認されている。図示した柱穴もその一つであり、調査区の東側で検出された。東側の柱穴は径 35cm、深さ 58cm で、床面に径 20cm、厚さ 8cm 程の根石を設置している。遺物は出土していない。西側の柱穴では柱痕は確認できなかった。埋土中からは瓦質の火鉢と思われる底部破片が出土した。



第 20 図 柱穴遺構実測図 (1/20)

第3節 区域2の調査

区域2(第21図)

区域2は調査区の西側半分で、東西長約90m、南北長10～15mの間を調査した。

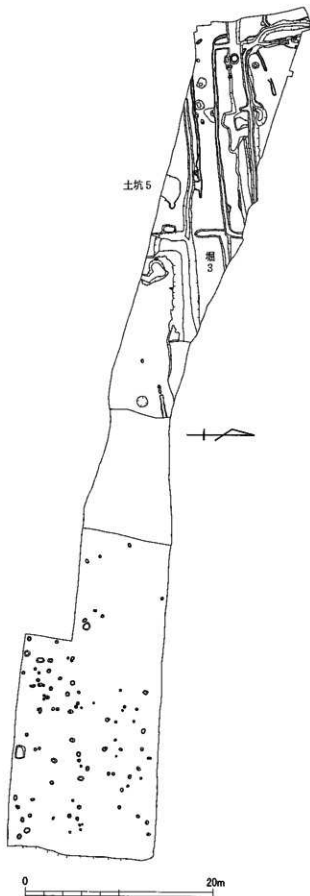
当調査区は調査区周辺のなかでも高い位置にあり、平坦に成形されている。

区域2は、中世の城館と思われる方形区画遺構2基(第3図)が、並列して構築されている内の西側城館内に位置する。

区域2の東端では、柱穴と思われる遺構が確認されたが、遺物の検出はなかった。

中央部分は現代の攪乱を受けていたため遺構はなかった。

西側は、城館の堀と、時期不明の溝状遺構が数条確認された。調査区からの出土遺物は、近・現代の遺物であった。



第21図 区域2遺構配置図(1/400)

土坑5(第22図)

土坑5は区域2の西端、南側壁で確認された。南側が現道路下にあり、未調査である。東西2.85m、深さ0.95mの方形に近い土坑と思われる。遺物は出土していない。

堀3(第23図)

堀3は、区域2の西端で確認された。城館の堀の一部で北西コーナー部分に当たり、現道路下になっていた。この堀の検出によって、城館のほぼ全容が明らかになった。

城館は東西約70m、南北60～70mでほぼ方形を呈している。このコーナーから南に延びる城館西側の堀は、若宮八幡神社の東側で確認できる溝状遺構へと続き、そのまま、南側の堀(現水路)へと延びていく。

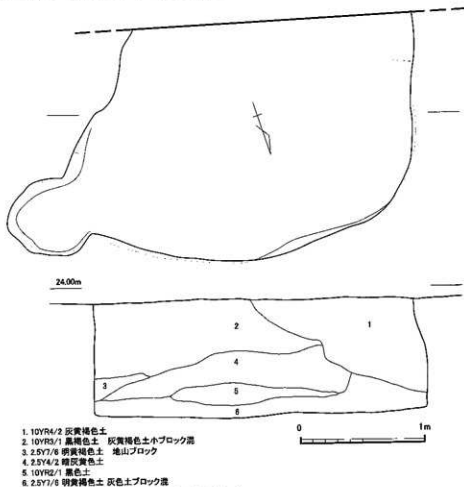
コーナーから東へ延びる堀の一部は、土地の境となっている。土地所有者によれば、この堀は、戦後一度埋めたものを、新たに掘り直した堀であるとのことであった。

堀の上部幅は約3.3m、深さは地表面から約1.7mである。床面は平坦で幅2.0mの逆台形を呈している。

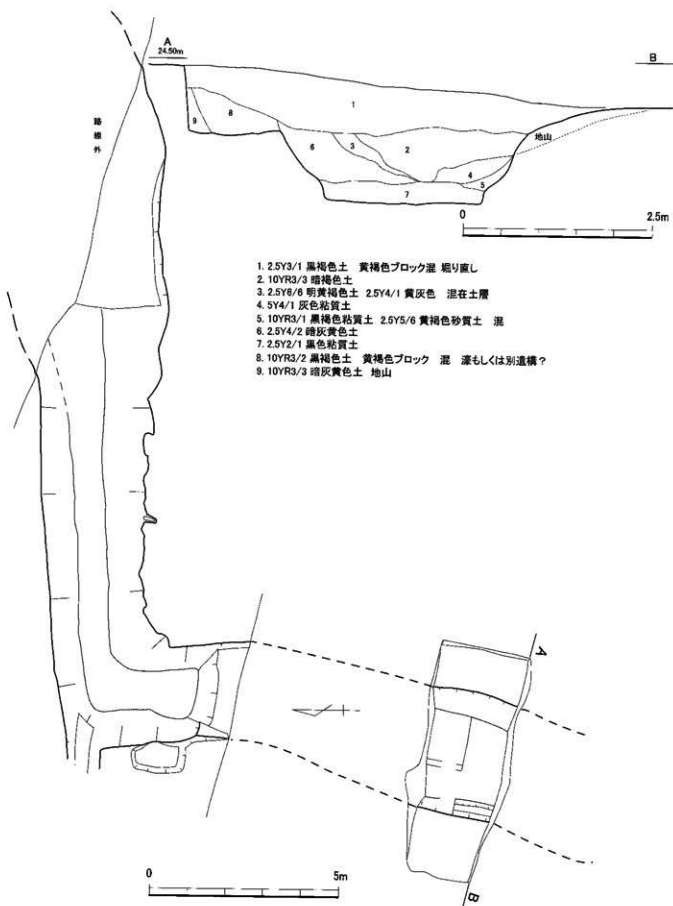
調査区北側では堀の内側は堀の外側より1m程高いが土塁などの施設は見られなかった。遺構の検出状況等から、内部は後世に盛り土を行ったものとする。

埋土は9層確認したが、1層は現在の堆積土、2～4層は堆積状況から掘り直しを行った様子がわかる。6・7は堀の埋土と思われる。8層も堀の埋土の一部と思われるが、別の遺構の可能性もある。9層は地山。掘り下げ途中から水が湧き、当時は豊富な水位を保っていたものと思われる。

遺物はコーナー付近から近世・近代など多くの遺物が出土しているが、堀の構築時期に伴うものではなかった。



第22図 土坑5実測図(1/30)



第 23 図 堀 3 実測図 (1/100・1/50)

溝状遺構 7～10(第24図)

溝状遺構 7～10 は区域2調査区西端に集中する。いずれも東西に延びる浅い溝である。

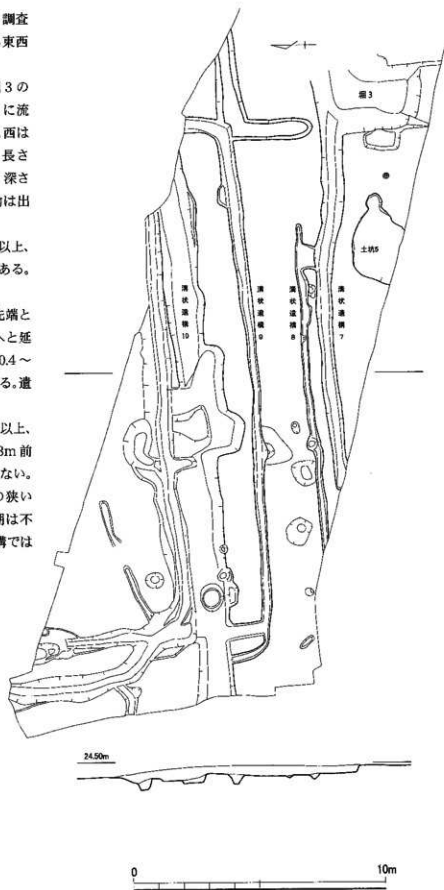
溝状遺構 7 は東の端が堀 3 のコーナーに接している。堀 3 に流れ込んでいた可能性もある。西は未調査区間に延びている。長さ 14.5m 以上、幅 0.5～0.6m、深さ 0.25～0.45m である。遺物は出土していない。

溝状遺構 8 は長さ 10.9m 以上、幅 0.3m、深さ 0.15m 前後である。遺物は出土していない。

溝状遺構 9 は東西方向の先端とも北側へ屈曲し、調査区外へと延びている。東西長 20.3m、幅 0.4～0.5m、深さ 0.3m 前後である。遺物は出土していない。

溝状遺構 10 は長さ 20.7m 以上、幅 1.5m 前後、深さ 0.2～0.3m 前後である。遺物は出土していない。

いずれの溝状遺構も幅の狭い浅い溝で遺物を伴わず時期は不明であるが、埋土から古い溝ではないと思われる。



第24図 溝状遺構 7～10 実測図 (1/150)

第4章 まとめ

福島遺跡の周辺は長久寺(田丸城跡)や、妙相寺(町居屋敷遺跡)、仮屋敷遺跡など方形区画を持ち、周囲を堀と土塁で囲まれた中世の城館が数多く集中する地域である。調査区の南西には「本丸」、「二ノ丸」、「三ノ丸」と呼ばれる字名がみられるが、本丸西側の「居屋敷」を含む地域が、「福島城」の一角と見られている。

当調査区は東西方向に並立して築かれている2基の方形区画城館北側に位置する。字図で見ると調査区中央の堀を挟んで西の城館部分は平塚、東の城館は居屋敷にあたる。

調査では堀3条と城館内部の遺構の一部を確認した。堀はいずれも調査区を南北に横断するが、時期を示す遺物を包蔵していたのは東端の堀だけであった。中央と西端の堀は最近まで使用されていたため掘り返し等も行われており、古い時代の遺物は出土してない。

東側の城館内の調査では城館を取り囲む堀の一部と内部施設が確認できた。内部からは柱痕を持つ柱穴や土坑、居住区の境を示すと思われる溝等が確認された。確認された遺構は、東側城館の北東端に位置する。南東部分は調査区外となり不明であるが、2条の溝が中央部分付近で調査区を東西に区別しており、溝より西側では柱穴や城館に伴うと考える遺構は検出できなかった。

堀は調査区東端で確認され、幅4m、深さ0.8m前後であった。この堀の確認によって東城館は、東西幅約90mであることが確認できた。南北幅は周辺地形から80m前後と推測される。堀は上部削平を受けているものの残りは良く、埋土中からは多量の土器が出土した。土器は瓦質土器の播鉢や鍋を中心に、備前陶器の播鉢の破片が数点出土している。出土遺物から、この堀は16世紀前期末～後半頃に埋まったと考えられる。

今回調査を行った福島遺跡平塚・居屋敷地区は、周辺地域よりやや微高地に位置していたため、遺構の残りは良いものと思われたが、西側調査区(平塚地区)では、城館の一部である堀以外は、明確な時期のわかる遺構はなかった。

東側調査区(居屋敷地区)では前述したように中世の遺構や遺物等、城館内の居住区の在り方などが確認できた。

今後、当地域周辺の詳細については、遺跡の所在する微高地上の現状や調査と伴に、伝承や文献を含めた資料の検討が必要である。



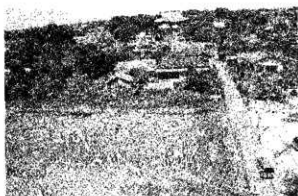
第25図 福島遺跡周辺字図

参考文献

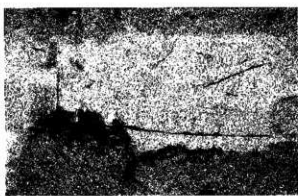
『中近世城郭』 北部九州中近世城郭研究会 2006年4月1日

『大分の中世城館 第4集 総論編』(大分県文化財調査報告集 第170集) 大分県教育委員会 2004年3月

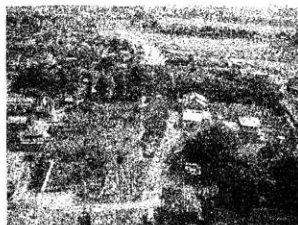
写 真 图 版



区域1 東側全景(南から)



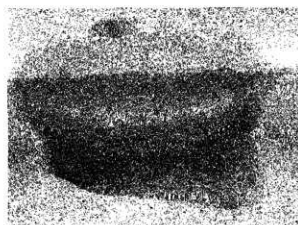
区域1 西側全景(上空より)



区域2 全景(西から)



土坑2 完掘状況(北から)



陥穴状遺構土層堆積状況(東から)



陥穴状遺構完掘状況(南から)



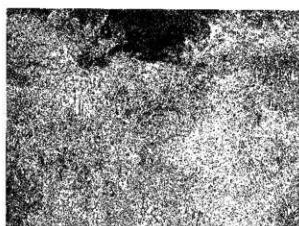
堀1 土層堆積状況(南から)



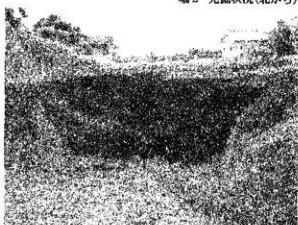
堀1 完掘状況(南から)



堀2 完掘状況(北から)



堀2 完掘状況(南から)



溝状遺構1 土層堆積状況(東から)



溝状遺構1 完掘状況(東から)



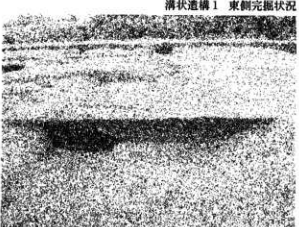
溝状遺構1 完掘状況(北から)



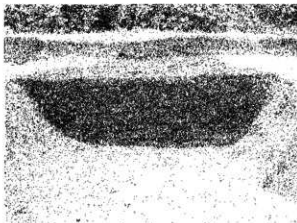
溝状遺構1 東側完掘状況



溝状遺構2 土層堆積状況(北から)



溝状遺構2 土層堆積状況(北から)



溝状遺構 2 土層堆積状況(北から)



溝状遺構 2 完掘状況(東から)



区域 2 東側柱穴検出状況



区域 2 西側全景



区域 2 西側全景(西から)



溝 3 完掘状況(西から)



溝状遺構 7~10 完掘状況



溝状遺構 9 完掘状況



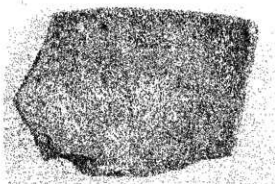
第12图-2



第12图-4 (外面)



第12图-4 (内面)



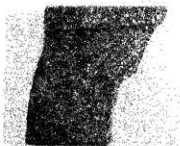
第12图-5



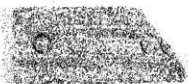
第12图-6



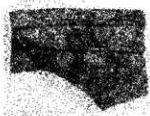
第13图-9



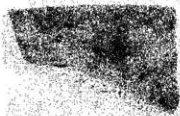
第13图-10



第13图-11



第13图-12



第13图-17



第18图-1



第13图-18



第16图-1

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふくしまいせきひらつかいやしきちく							
書名	福島遺跡平塚・居屋敷地区							
副書名	県道万田四日市線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)							
巻次								
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第67集							
編著者名	友岡信彦							
編集期間	大分県教育庁埋蔵文化財センター							
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977 Tel. 097-597-5675							
発行年月日	2013年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
ふくしまいせき	なかつしおおあぎよくしま							
福島遺跡	中津市大字福島	203	050	33° 33' 49"	131° 13' 51"	平成23年7月13日 ～ 平成23年10月14日	2,568㎡	県道万田四日市線道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
福島遺跡	城館	中世	堀溝	中世(16世紀代) 摺鉢 火鉢 鍋				
要 約	<p>福島遺跡の調査では、堀3条と中世の遺構を確認した。</p> <p>堀のうち、東端の堀は新たに確認した遺構で、方形区画城館の東端の堀である。この堀の埋土には多くの遺物を含んでおり、良好な状態で残っていた。出土遺物から16世紀後半に埋まった堀である。</p> <p>東側調査区では、城館の東側で柱穴や土坑などが確認された。おそらくこの区域が居住区であり、中央付近を2条の溝で東西に区割りしていた。西側調査区では、城館を囲む西側の堀が確認できた。</p>							

福島遺跡平塚・居屋敷地区

県道万田四日市線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第67集

平成25年3月29日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113 大分市大字中判田1977番地
TEL (097)597-5675

印刷 えとう印刷
〒878-0162 大分県竹田市大字炭竈371番地
TEL 0974-64-5815
